

意味でつなぐ英文法： 無機質な指導からの脱却を目指して

渡 部 友 子

要旨

本稿では、中学校の英語教科書や参考書の記述と練習課題をいくつか取り上げ、現行の文法指導において意味や表現内容がいかに軽視されているかを指摘し、そのような無機質な文法の扱い方が文法習得を阻害しているのではないかと問題提起する。そして不定詞と助動詞について、意味を中心に据えた文法指導はどのような形になりうるか、具体的な提案をする。

目次

- I はじめに
 - II 文法がもつ意味とは
 - III 意味をどう理解させるか：不定詞を題材に
 - IV 意味が関連する文法とどうつなげるか：助動詞を題材に
 - V おわりに
- 引用資料

I はじめに

筆者は数年前から、本学言語文化学科の3年生を対象とする英語ライティングの演習を担当している。この授業において10分間、辞書を使用せずに英語を書けるだけ書く、という活動を毎回行なう。この作文に目を通すと、初級の文法が身につけていない学生が少なからずいることに愕然とする。以下は、2019年度の夏休み明けの作文の実例である。

I visited Korea in this summer vacation. Because, I want to meet a Korean friends. I'm stayed at the my friends house for two weeks. My friends family had very kindness. She's mother had make a Korean food every dinner. So I had make a Japanese food for a she's family. I maked a "okonomiyaki" and "oyakodon". (原文ママ)

冠詞がうまく使えないのは想定範囲内である。しかし、代名詞の所有格 her や、have と make という最も基礎的な動詞の過去形が適切に使用できていないことは見過ごせない。また、品詞の区別が苦手な学生は多いが、kind という基本語でエラーが起きていることに

も驚く。

果たして、彼らは英文法を学習していないのだろうか。日本の英語教育が文法訳読からコミュニケーション重視に舵を切って久しいが、それでも文法は重要だという考えをもつ教員は多いし、教科書にも文法のセクションはあるので、指導はされているはずである。その一方で、大学生用の学び直し教材は出版され続けている。大修館書店の『大学生のためのジーニアス基礎英文法』がその一例である。それは、文法の基礎を習得できないまま大学に入学する、上掲のような者が多い、ということを示唆する。

なぜ、学習しているのに使えるようにならないのだろうか。それは、文法の学びが「問題を解く」ことに終始し、表現される内容（意味）が軽視されがちだからだと筆者は考える。このことは、筆者が担当する「英文法」の講義開講時に「英文法に関する感情や経験」をたずねた際、書き込まれた答えに端的に表れている。以下は、その記述の一部の引用である。

中学校・高校で一通り文法を学んできたが、筆記試験でよくできていたものが会話の場面になると、咄嗟に言葉が出てこなかったり、間違った文法で話したりすることが多々あった。(受講者S: 2021年4月12日 manaba プロジェクト内掲示板)

英文法は覚えることが多く、また難しいものであるというイメージが強いため勉強してインプットできてもアウトプットへとつなげるのが難しいという感情を抱いていました。(受講者N: 同上)

この記述の中には、自分が言いたいことを表現しようとする、覚えたはずの英文法が出てこない、と苦しむ姿が見えるような気がする。

もちろん、覚えたことを実際に使えるようになるまでには時間がかかる。しかし、教育現場で使用されている教材を見ると、使えるようになるための道筋がそもそも作られていないように思われる。なぜなら、文法が意味の表現手段としてではなく、形式上の規則としてしか認識されていない傾向があるからである。本稿ではまず、中学校の英語教科書や参考書を例に、文法指導においていかに意味が軽視されているかを指摘する。そのあと、意味を中心に据えた英文法の捉え直しを具体的に提案する。

II 文法がもつ意味とは

前出の「英文法」の講義では、文法は「意味を理解する・作る」ためにある、と開講時に

宣言する。例えば、名詞の前に a が付くか付かないか、あるいは後ろに s が付くか付かないかで、伝わる意味が変わる（田中 2017, 大西・マクベイ 2008, など）。だから本講義では、形の違いがもたらす意味の違いを理解することを目標の一つとしている。このことに対し、受講生からは以下のような反応があった。

これまでは英文法の学習は暗記が中心でした。そのため、意味やニュアンスの違いなどを意識することがなく、表面的な理解に留まっていました。（受講者 N, 2021 年 4 月 12 日, プロジェクト内掲示版）

いままでは英文法は意味を持つものとしてではなく、文を成り立たせるためにあるものという考えが強かったです。そのため、英語の文章を読んでなぜこの文ではこの文法なのだろうと疑問に思うこともありました。（受講者 H, 2021 年 4 月 13 日, 同上）

英文法の指導で意味が教えられていないのかというと、そうでもない。教科書や参考書では、文法項目には必ず「こういう意味だ」と説明が付けられている。しかしよく見ると、それは意味ではないと反論したくなる説明が多い。そのことを、不定詞と動名詞を例に示す。

まず、不定詞と動名詞をまとめて説明した参考書（ひだか 2016, pp. 146-147）の記述を以下に見てほしい。下線と番号は引用者が追加したものである。

- (1) I went to school to play tennis.

動詞 went を修飾し、なぜ行ったのかを説明している。

- (2) I like to play. I like playing. (遊ぶことを好む。遊ぶことが好きだ。)

動詞 like のすぐ後ろに置かれて、「遊ぶことを」という意味

- (3) To play is fun. Playing is fun. (遊ぶことはおもしろい。)

動詞 is のすぐ前に置かれて、「遊ぶことは」という意味

- (4) My hobby is to play. My hobby is playing.

動詞 is のすぐ前に置かれて、My hobby が何であるかを説明している

上記 (1)-(4) の下線部が、例文内の不定詞句と動名詞句の意味の記述だと思われる。(1) と (4) は意味だと言えるが、(2) と (3) では、文構造の違いが「を」と「は」の違いによって表現されている。それは、不定詞句や動名詞句自体の意味とは別である。そして実は、この to や -ing は、文の意味に寄与しない。文内のこの場所に入れるために動詞を名詞に転換

するという、形式的役割を果たしているだけである。もし句の意味を(1)や(4)と同列に捉えるなら、(2)は「何が好きなかを説明している」、(3)は「何がおもしろいのかを説明している」とすべきであろう。

今指摘したように、不定詞の名詞的用法は意味を持たない。意味を持たないものに無理に意味を当てようとした結果、日本語の形式名詞「こと」が使われ、それが指導現場で浸透している、というのが現状のようである。東京書籍の中学校教科書 *New Horizon 2* (以下 NH2 と略す) に見られる説明を、以下に示す。

- (5) I want to be a chef. (NH2, p. 35)

不定詞 (名詞的用法) 「…すること」「であること」という意味

want to は「…したい」、want to be は「…になりたい」という意味

これを見ると、不定詞句の意味はあくまで「こと」であり、want と繋がったときの意味は全く別物のように提示されている。「こと」にこだわるのなら、「こと」がどうして「したい」になるのか、意味の作られ方を理解させる必要があるのではないか。

この教科書の動名詞の説明では、以下のように、意味は「こと」で済まされている。

- (6) We enjoyed listening to *rakugo*. (NH2, p. 85)

動名詞: 動詞に ing がついた形は、進行形で使うほか、「…すること」という名詞の働きをする。

- (7) Playing soccer is fun. (NH 2, p. 87)

動名詞 (「…すること」) を主語として使うこともできる。

説明の中には「名詞の働き」という言葉が出てきているが、名詞の働きが何かを理解している中学生は少ないだろう。また「進行形で使う」のは事実であるが、動名詞と進行形は、文内での役割、つまり文意への寄与の仕方が全く異なる。そのことを理解させずに、形が同じことだけに軽く触れるのは、生徒を混乱させるだけである。

もう一点、教科書や参考書の文法指導で気になるのは、例文の意味の薄さである。例えば、前出の参考書(ひだか 2016) で使用された例文を再度見てみよう。

- (8) I went to school to play tennis.

- (9) I like to play. I like playing.

- (10) To play is fun. Playing is fun.
(11) My hobby is playing. Playing is my hobby.

まず (8) は、いつの話をしているのか。テニスをしに学校へ行ったと言うなら、おそらく授業のない日に部活動をしに行った、ということだろう。授業日のことを言っているなら、学校に行く本来の目的と異なるので不適切だ。部活動が通学する目的になってもよいが、(8) はそれだけが目的だと宣言しているため、適切な文脈が限られるのだ。また went と行っているの、この文は学校以外の場所（自宅など）で発話されなければならない。

次に、(9)-(11) では、動詞が play だけなので意味が薄過ぎる。何をして遊ぶのが好き、楽しいのか、と聞きたくなる発話である。加えて (11) には別の問題もある。「遊びが趣味」と言えるのか疑問であると同時に、hobby の中身が不定詞で表現されることはほほない（八木 2013）という事実を踏まえると、例文としての適切さはさらに下がるのである。

このような指摘は揚げ足取りだと感じる向きもあるだろう。型を見えやすくするために、文法項目を例示する文はなるべく単純な方がよい（中條ほか 2016）ことは確かである。だからひだか（2016）は、動詞 1 語を不定詞や動名詞にしたのだろうと推測する。また文内の構造を学んでいるのだから文脈は切り離すのが当然、という考えもあるだろう。しかし筆者には、文脈からの切り離しが例文を実体のないものにし、実体のない例文で文法を学び続けることが、文法の習得を阻害しているように思えてならない。

次節以降では、不定詞と助動詞を取り上げ、教科書や参考書の指導でいかに意味が軽視されているかを示す。その後、意味を中心に据えた指導の方法を具体的に提案する。

III 意味をどう理解させるか：不定詞を題材に

不定詞は使われ方によって意味が異なるため、それが三つの用法として指導されることが多い。そのうち、先に示した例文 (8) I went to school to play tennis にみられる副詞的用法は、意味が最も理解しやすいためか、NH2 では不定詞として最初に指導されている。自然な形でこの文法項目を導入するために、この教科書では、中学校で広く実施されている「職場体験」という場面を設定した。ディーパという留学生在が職場体験の一環でレストランに行き、そこで見た注意書きが以下の本文（NH2, p. 32）である。下線は引用者による。

Don't forget :

Wash your hands in the right way.

Look in the mirror to check your appearance.

Greet customers with a smile to welcome them.

“I’m here to learn about jobs in restaurants.” (引用者注：ディーパの発話)

この5文足らずの文章の中に、新出語が7つ（一重下線部）、新規文法が3箇所（二重下線部）に組み込まれていることにまず注目してほしい。つまり、教えようとしている新出の単語と文法項目だけで、インプットがほぼ構成されているのである。この英文をそのまま学習者に提示する場合、学習者は当然意味を推測することができないので、教員が「不定詞 to は…するために、という意味です」と先に教え、単語の意味も全部教えてから、文の意味を考える、という手順を踏まざるを得ない。

意味を推測できるようなインプットを与えれば、学習者は文法項目の持つ意味に自ら気づくよう促せると筆者は考える。意味の推測を可能にするには、既習の単語と文法でインプットを構成し、その中に新出項目を入れ込む必要がある。新しい内容が少しだけ入った「理解可能なインプット」は学習を促進するとされる（ライトバウン & スパダ 2014 など参照）。

上記の本文を教材とするなら、教材を読みながら、以下のようなやりとりを教員が口頭で行うことで、理解可能になるのではないだろうか。

You work in this restaurant. What do you do first? — Wash your hands. Then, what do you do? — Look in the mirror. Why? — To check your appearance. (I check my hair, check my shirt, …などと言いながら動作をし、appearance の意味を理解させる) I look OK! Finally, what do you do? You greet customers with a smile. Why? — To welcome them. That’s right. Customers come. Then you smile, and say “Welcome to this restaurant!”

この説明のポイントは、行動とその理由を切り離し、間に why? を入れることだ。これにより、なぜそうするのかを説明するのが to だと気づかせることを狙っている。形の規則、つまり to の後ろに動詞の原形をとる、ということは、意味がわかってから説明する。これは focus on form と言われるアプローチである（高島 2011 などを参照）。

さらに追加で、Why do you wash your hands? と聞いてみたら面白いかも知れない。なぜなら、手を洗う理由は不定詞で本文に書かれていないからである。書かれていないことに気づかせ、生徒から考えや表現を引き出すことは、主体的な学びにつながる。また最後に Why is Deepa here? と聞けば、本文中の最後の不定詞をカバーすることができるだろう。

次に検討するのは、文型練習である。既出の NH2 で want to を扱うユニットでは、以下

のような基本練習が設けられている (NH2, p. 35)。

例にならって言いましょう。

例 I want to be a chef. (引用者注：下線部に与えられた表現を代入)

1. I, visit Canada
2. my father, have curry for dinner
3. John, be a teacher

典型的なパタン・プラクティスであり、このような練習は文字通り「無意味」である。なぜなら、文に挿入される語に全く実体がないからだ。1の文を発する時、生徒はカナダに行きたいと思っていない。自分の父親が何を食いたいのか知らないし、そもそも父親がいないかも知れないのに、2の文を言わなければならない。そして、Johnとは誰なのか知らない状態で3の文を言わせられる。

さらに、この練習の下に、自分が将来つきたい職業について、例にならってペアになって対話をする、という練習が設けられている (NH2, p. 35)。

例 A: What do you want to be in the future?

B: I want to be a soccer player.

こちらは、生徒が自分で言う内容を決められるので、幾分マシである。しかし、本当につきたい職業を「どう英語で言えばいいかわからない」という理由で回避し、簡単に言える職業を言ってしまうかもしれない。また、つきたい職業がまだ定まっていない生徒もいるだろうが、「まだわかりません」という選択肢は与えられていない。結局のところ、パタン・プラクティスの域を出ていないのである。

このように、文法の練習から意味（言いたい内容）が消えてしまうのは、使用する文法を限定するからだと筆者は考える。意味をやりとりしながら、狙った文法を使用させるためには、話題を設定し、既習の語と文法も使用しながら、会話の中に意味の基盤を作る必要がある。例えば、やりたいことを話させたいなら、夏休みや土日など、具体的な設定をして、教員が以下のようなやりとりを主導してはどうだろうか。

教員: Where do you want to go during summer vacation?

生徒: Tokyo Disneyland.

教員： You want to go to Tokyo Disneyland?

生徒： Yes, I want to go to Tokyo Disneyland.

教員： Why? Why do you want to go there?

生徒： I like Mickey Mouse.

教員： Oh, you want to meet Mickey Mouse.

生徒： Yes, I want to meet Mickey Mouse.

このやりとりで教員は、生徒の断片的な発言を受け止め、発言の意図を確認する機能を持たせつつ、文を整えて返す、という手法（リキャスト）を使っている（ライトバウン & スパダ 2014 ほか）。結果的に、生徒は want to を使った文をいくつも聞き、自分でも言っている。つまり、やりとり自体がパタン・プラクティスになるよう仕組みられているのである。

このような会話を通して、生徒は自分の発話に責任を持つようになると思われる。なぜなら、教員は生徒の発話内容を掘り下げてくるからだ。もし東京に行きたい、と答えたら、東京で何をしたいのか、と必ず聞かれる。その場をやり過ごすために一言答えて終わることができないのだから、本気で答えることが得策だとわかるだろう。

最後に、例文をどう意味づけするかを検討する。前出の (8) については、文脈さえあれば意味を持った発話になることをすでに指摘した。I が誰であるか、そしていつの話なのかを明確にすれば、それは可能である。例えばテニス部の生徒を I とし、日曜日の出来事を月曜日に話す、と仮定すると成立しそうに思えるが、教室で生徒がこの発話をするのは不適切である。なぜなら、今学校にいる者が I went to school とは言えないからだ。そこで教員を I とし、自分の中学時代を振り返って語る、という設定はどうだろうか。

When I was your age, I went to school to play tennis. I didn't like studying at all, but I went to school every day because the club activities were fun. I didn't go to school to study. I went to school to play tennis.

これだけの文脈が既習の英語で語られ、その中にターゲットの文が出てきたら、意味の理解は詳しい説明を要しないだろう。ただし教員が自分のことを I で語る場合、たとえ指導のためであっても、架空の内容であるべきではないと筆者は考える。創作した架空の内容を使うなら、筆者が批判してきた実体のない例文を使うのと変わらず、逆に長くなる分だけ難しくなるからだ。中身のある文脈は、現実に基づくことで力を持つ。従って、自分の中に語りに必要な材料がないなら、例えば同僚教員から実話を聞き取ってそれを語りに使うことが望ま

しい。語りが一人称である必要はないので、主語をその教員の名前にして三人称で語ればよいのである。

例文 (9)-(11) については、中身を差し替える方がよいだろう。この3文は内容が薄いだけでなく、そもそも動名詞や不定詞をなぜ使うのか、という視点が欠けているように思われる。名詞で済む所にわざわざ動詞を使うのは、動詞が必要だからである。つまり動詞を入れることで可能になる表現内容があるのだ。そのことを示す文脈と例文、すなわち以下のようなものが必要である。

(12) I like soccer. I don't play soccer, but I like watching it.

(13) Watching soccer is fun, but playing it is more fun.

(14) I love crossword puzzles. My hobby is solving them.

なお、上記 (9)-(11) のように、不定詞と動名詞が交換可能であるかのように提示することは不適切である。なぜなら、前者には未来志向、後者には現実志向があり、すでに実行していることは動名詞で表現される傾向があるからだ。この区別はすでに高校生向けの参考書にも記載されている(中邑ほか編 2017 など)。文脈によっては違いが小さくなることもあるが、(12)-(14) においては動名詞を使う方が自然だと思われる。不定詞との意味の違いを中学生に説明することは難しいが、少なくとも教員は、機械的な言い換え練習を生徒に強要しないようにすべきである。

IV 意味が関連する文法とどうつなげるか：助動詞を題材に

CAN, MUST, WILL などの助動詞は、一つずつ順番に指導されがちな文法項目である。例えば、前出の教科書 NH では、1年生で CAN を導入したあと、2年生の Unit 4 で HAVE TO, WILL, MUST をこの順で導入している。(15)-(18)にそれぞれの基本文と意味の説明を示す。

(15) I have to speak English here. I don't have to speak English here. (NH2, p. 55)

「しなければならない」と必要性や義務を表すには have to+動詞の原型
否定文では「しなくてもよい」という意味になる。

(16) I will show you some pictures tomorrow. (NH2, p. 57)

助動詞 will 「…するつもりです」「…でしょう」と意志や未来のことを表す

(17) You must help your mother. (NH2, p. 59)

助動詞 must 「…しなければならない」と禁止や命令を表す

(18) You must not eat too much. (NH2, p. 61)

助動詞 must + not 「してはならない」と禁止を表す

いずれも、意味は日本語訳で与えられている。これは、助動詞は先の不定詞や動名詞と異なり、語として独立した意味を取り出せることの表れである。このような意味の取り出し方が引き起こす弊害については、後述する。ところで、(15)の説明に「助動詞」という語が使用されていないことに気づく読者もいるだろう。これは、HAVE TO が厳密には助動詞ではなく一般動詞だからで、疑問文や否定文の作り方を比較すればその違いがわかる。しかし意味の領域は助動詞と重なるので、助動詞に準ずる扱いになっている。

ここでまず問題にしたいのは、助動詞が一つずつ順番に指導される、という構造である。例えば(15)が出てくる本文は、以下のようにになっている。中学2年生の咲(サキ)が夏休みにアメリカでホームステイをし、現地で配られたガイドブックに書いてある内容を読む、という設定である。下線は、二重線が新出文法、一重線が新出語を示す。

Homestay Advice

You're a member of the family. You have to follow the family's rules. You have to speak English here. But you don't have to speak perfect English. Communication is important.
(NH2, p. 54)

第3節で取り上げたテキスト同様、新出文法と新出語が占める割合が高くなっているため、このまま提示した場合に生徒が自力で理解できない。しかし実は、内容はそれほど難しくない。1年生で既に習っている命令文や CAN を使って言い換えれば、「理解可能なインプット」になるはずである。

Follow your host family's rules. (例を出す: Come home by 7. Get up by 6.)

Speak English here. Don't speak Japanese.

Your English is not perfect? That's Okay. You can make mistakes.

Mistakes are not important. Communication is important.

このように、新出の文法で表現されている内容を、既出の文法で表現し、文法を意味でつなげることが、両方の文法の理解を促進し、生徒の表現力を高めると筆者は考える。助動詞の

意味は、裏返すと別の助動詞と論理的に同等になることは知られている。You don't have to speak perfect English とは言い換えると、You can make mistakes という意味なのだ。しかし、教科書の中ではこのような導き方をしていないため、教員が行わない限り、生徒の中では CAN と HAVE TO は関係づけられないままである。

実は、中学校の教員がこれを行なった（おそらく 10 年以上前の）実践例があり、上記の提案もそれに触発されたものである。東京都の中学校教員だった田口徹氏（現在は大学の非常勤講師）は、助動詞 MUST を導入する際、オーラル・イントロダクションという手法（門田ほか 2010 などを参照）で、以下のようなやりとりを実演した映像がある。

（車を運転している、という状況を設定し、右折の標識を見せる。）

What do we do? Can we turn left? No, we can't turn left. Can we go straight? No, we can't go straight. What do we do? Turn right. We MUST turn right.

（次に、止まれの標識を見せる。）

What do we do? Can we turn left? No. Can we turn right? No. Can we go straight? No. We can't do any of those. I stop. You stop. Everybody stops. We MUST stop.

MUST ってどんな意味だと思う？

この実践が優れているのは、具体的な物や状況を提示して「意味が見てわかる」状態を作った上で語っていることと、既習の CAN と CAN'T を持ち出して、MUST の意味領域との重なりを理解させようとしていることである。このような指導ができる教員が増えれば、文法の学習は意味に支えられた強固なものになるだろう。

最後に取り上げたいのは、文法項目の意味として日本語訳を当てることの弊害である。先に示した (16) では、WILL の意味は「するつもりです」「でしょう」だ、と教えている。しかし、このように固定的な訳をはめてしまうと、時に意味理解が阻害される。このことを見るために、(16) の基本文が出てくる本文の後半を下に示す。咲がホームステイ先で Make your bed と言われたが理解できない、という場面で、最後に WILL が出てくる。

Mrs. Wilson : Make your bed and come downstairs.

Saki : Make my bed?

Mrs. Wilson : We all have to make our own bed.

Saki : OK. But I don't know how.

Mrs. Wilson : All right. I'll show you. (NH2, p. 56)

下線の発話は「じゃあ教えてあげる」くらいのニュアンスである。そのあとすぐ隣の寝室に入ってベッドを整えるわけだから、「あなたに見せるつもりです」でも「見せるでしょう」でもない。しかし、本文の隣のページにそういう意味だと書いてあるのだから、無視するのは難しい。その結果、この会話の状況が理解できなくなってしまうのである。

どうやら多くの生徒が、WILL を機械的に「つもり」「でしょう」と訳すことを刷り込まれすぎてしまっているようで、「そぎ落とし」が必要になっている。前出の参考書においては、以下のような例文と解説があることに注目してほしい。

I will be fifteen years old.

「私は 15 歳になるだろう。」「私は 15 歳になるつもりだ。」どちらも、少し変な感じがしますね。そういう場合には「だろう」や「つもりだ」を省略して…訳します。このように、will という助動詞にはムリに訳さなくてもいい場合があります。(ひだか 2016: 89)

このように、最初に指導したことを後から忘れさせなければならないとしたら、最初の指導が適切でないと受け止め、改善すべきである。

V おわりに

本稿では、中学校の英語教科書や参考書の記述と練習課題をいくつか取り上げ、現行の文法指導において意味や表現内容がいかに軽視されているかを指摘し、そのような無機質な文法の扱い方が文法習得を阻害しているのではないかと問題提起した。そして不定詞と助動詞について、意味を中心に据えた文法指導はどのような形になりうるか、具体的な提案をした。

基礎的な文法が習得できていない大学生がいること、そして彼らのための学び直し教材が出版されていることは、本稿冒頭で述べた。しかし、以下のような教材が彼らを助けるとは思えない。

本書は、文法書『ジーニアス総合英語』に準拠した、問題を解きながら基礎的な文法事項を習得していくテキストです。

(『大学生のためのジーニアス基礎英文法』はしがき p. iii: 下線は引用者による)

1. 次の日本語の意味に合うように、() に入る適切な語(句)を選びなさい。

- (1) 私の父はあまりトマトが好きではない。

My father () tomatoes very much.

like likes don't like doesn't like (同上, p. 5)

英語が苦手な学習者はおそらく、このような架空の文で規則を覚え、問題を解く作業を長年続けてきた。だから、言いたいこと、書きたいことがあるときに、簡単な文法すら使えない、つまり習得できていないのだ。彼らに必要なのは、文法に意味を取り戻すことである。問題集のやり直しではない。文法の学習で、文脈や意味を深く考えたりするのは効率が悪いと言う人にはこう問いたい。文脈も意味もなしで規則だけを何年も勉強するのは効率的ですか。と。文法の一つ一つと意味をつなぐ指導を丁寧に行なうことが習得につながると筆者は信じる。

なお、本稿の内容は、2021年夏に開講する英語教員免許更新講習で提示する予定である。この講習ではさらに、接続詞 IF と WHEN, BECAUSE と SO, そして高校レベルで何ができるかも提案する準備がある。追加される内容については、本稿の続編として後日発表したいと考える。

引用資料

- 大西泰斗・P. マクベイ (2008) 『英単語イメージハンドブック』 青灯社
門田修平・野呂忠司・氏木直人 (2010) 『英語リーディング指導ハンドブック』 大修館書店
金谷憲・谷口幸夫監修 (発表年不明) 『英語授業の実践指導事例集 Part 1: 達人に見る授業の組み立てとアイデア集 第7巻 田口徹先生の授業 (1)』 ジャパンライム
大修館書店編集部編 (2020) 『大学生のためのジーニアス基礎英文法』 大修館書店
高島英幸編著 (2011) 『英文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』 大修館書店
田中茂範 (2017) 『表現英文法 増補改訂第2版』 コスモピア
中條清美ほか (2016) 「SCoRE 開発と特徴」 The Sentence Corpus of Remedial English プロジェクトの公開サイトより閲覧 (<https://www.score-corpus.org>)
中邑光男・山岡憲史・柏野健次編 (2017) 『ジーニアス総合英語』 大修館書店
ひだかたかのり (2016) 『とことんていねいな英文法レッスン』 ナツメ社
ライトバウン P. & スパダ M. (2014) 『言語はどのように学ばれるか』 (白井恭弘・岡田正子訳) 岩波書店
八木克正 (2013) 「My hobby is collecting stamps / My job is to cure diseases: 補文の形式を指定する主語名詞」 英語語法文法研究第20号, 73-87.

文部科学省検定済教科書 (2016) New Horizon English Course 1-2. 東京書籍